

第2回 京都キタ
短編文学賞

一般部門／『ハルの、還る家』——黒田きな子

ジュニア部門／『とかすもの』——山本千遥



<回覧印>

刊行にあたって

「第2回 京都キタ短編文学賞」小冊子をお手に取っていただきありがとうございます。

京都市北区長の川妻聖枝と申します。

北区役所では、令和四年度に北区が舞台の短編小説を全国から募集し、優れた作品を表彰する「京都キタ短編文学賞」を創設しました。

そして、令和五年度には「第2回 京都キタ短編文学賞」を実施しましたところ、全国から一九五の作品が寄せられました。その作品の中から、厳正なる審査を経て、「一般部門」と小中高生が対象の「ジュニア部門」から、合わせて七作品を入賞作品として選出致しました。

本冊子には入賞作品の中から、各部門の最優秀賞を受賞した二作品を収録しております。

北区が舞台であるこの素晴らしい作品を、是非とも北区民の皆様にも読んでいただきたい。そう思った思いから、この小冊子を制作致しました。作品を通して、改めて私たちのまち北区の魅力を感じていただけますと幸いです。

令和六年八月

京都市北区長 川妻聖枝

第2回
京都キタ短編文学賞

ハルの、還る家

黒田きな子

一般部門 最優秀賞

ハルと出会ったのは、堀川北大路の小さな不動産屋を訊ねた二月、小雪が空に舞う、寒い日のことだった。

ねずみ男のような風貌の店のおっちゃんは最初、小綺麗で家賃のそこそこ高い新築のマンションばかりを俺に勧めてきたのだけれど、俺が今住んでいるアパートの床を千冊近い蔵書が埋め尽くしているのだからそれを取納できる住居を探しており、かつ自分は大学を卒業しても就職をせず、春からは大学院生として引き続き金のない学生生活を送る予定なのだと言うと「ほんならこれでどないや」と言つて棚の奥にある分厚いファイルを引っ張り出して来たのだった。

それは鞍馬口通を堀川から千本に向かう途中にある小さな町家で築年数は約百年、当たり前に古く特に綺麗でもなく、全室畳敷きで追い炊きのできない風呂にその上台所が土間にあるというその町家を

「そんだけ本があつて床の抜けへんように頑丈な家が良くて家賃も安いてなると借家や、まあ住んだらどこでも都やさかい」

ハルの、還る家

このような絶妙な適当さと軽さで勧められていた。その時、俺の隣の俺と同じように安い部屋を探しにきたらしい髪の長い男が突然こちらに首を伸ばして

「なア、そこ俺と一緒に住まへん？家賃折半で」

そう言ったのだ。どうしてあの時「あ、おう、ええよ」と即答で快諾したのか、あれだけは自分でも未だによく分らない、天啓というやつだったのかもしれない。

そいつは永野貴晴ながの たかはるという名前で歳は俺の三つ上の二十五歳、この春から大学院に行く予定だと言った。それで俺が自分は香山圭太かみざん けいたで名前で大学は立命なんですけれど、永野さん大学どこなんですかと聞くと、ニツと人懐こそうに笑い「敬語やめようや、ハルでええし」と言うので、ほんならハル大学どこで専攻は何やと聞くと、ハルは家の間取り図を眺めながらこう言った。

「同志社、キリスト教神学」

「へ、へえ…」

「あ、今、やべえ怪しいヤツやなて思たやろ」

いやそんなこともないで言おうとしたのに大変正直に「うん」と返事をしてしまった俺をハルは正直やなアと言ってグラグラ笑った、聞けばハルは高校の頃から奨学金とバイトで学費を稼ぎ、大学までは自力で出たもののそこで金策が尽きたというか、このまま奨学金という名の借金でケツに火のついたまま学生を続けてゆくのもかなわんと考えて、大学を卒業した後三年必死に働き、来春大学院に戻る算段をつけたところなのだという。

「何して稼いでたん」

「昼は河原町のラーメン屋、晩は木屋町の女装パブで働いとった」

「じゃそ…えっ、あの、ほしたらハルは、そういう人？」

「そういう人ってどういう人やねん」

圭太は全然好みのタイプとちがうでと笑ったハルは、実際のところ特に女装が趣味な訳でも同性を恋愛対象としている訳でもなく、アルバイトをしていたラーメン屋の常連だったその店のママがちよつとの間店を手伝ってくれへんかと言うので、きつと厨房の人手が足らんのやろうとごく軽い気持ちでええですよと引き受けたら、あんた綺麗な顔してるでちよつとコレ着てみ、口紅塗ってみ、いやよう似合うわなど言われて何かしら人間にキャストとしてショーに出るようになってしまった、いわば成り行きの女装子なのだというこ

ハルの、還る家

とだった。

「フツ―断らへん、そういうの」

「いやこれがな、ショーに出るところ…お客さんが俺の乳の隙間に札をスツと入れてくれるねん、これが入ってくるカネが結構バカにでさんのよ」

「乳の隙間で何やねん」

「そらだって、俺に胸の谷間があつたらおかしいやろが」

不動産屋で契約書などを受け取った後、ちよつと喋ろうやと言うハルに北大路ビブレの一階にある喫茶店でコーヒ―を奢ってもらった俺は、あらためてハルの顔を間近でじっと見た。大きな瞳にくつきりとした二重、鼻梁は高くすんなり形が整っており、よく笑う唇は程よい厚みで、仕事用に長く伸ばしている髪を一つに束ねた姿は、近くを通った女の子がハツとした顔をして二度見するような端正さであつて、なるほどこれは化粧をしたら相当な美女に化けるのやろうなと、俺は妙に納得をした。

それから何度かハルとは電話やメールでやり取りをして、俺達が再び顔を合わせたのはハルの引越してくる当日の三月の半ばのことだ。前日から軽トラを借り、それに大量の書籍とわずかな家具家電などを積んで白梅町のアパートと船岡山にほど近い新居を往復し

て大体の搬入を済ませていた俺は、新居を掃除しながらハルの到着を待っていた。

春の柔らかな陽射しの注ぐ午後一時に玄関の呼び鈴が鳴り、「遅かったなア」と言いながら玄関に向かうとそこにはダンボールを二つと、巨大なバックパック、そして小麦色の犬を連れたハルが立っていた。

「ちよっ…待って、どういうこと？犬？」

「それがなア、話せば長くなるんやわこれが」

「手短に頼むわ」

「…オカンに犬貰ってって頼まれました」

ハルの母親は城陽でスナックをやっていて、この度めでたく店の客であった男と一緒に暮らすことになったらしい。しかしその男が犬嫌いで、ここ三年程「もう男はいらん、あたしはこの子だけや」と言って可愛がっていた柴犬をあつさり「あんた、これあげるわ」と言ってハルに託したのだと言う。

「そんなん断わろうや…犬とか飼ってええって言われてないし」

「だってなんかコイツが可哀想で…なア」

ハルの、還る家

大というのは人間の言葉のどれくらいが判っているものか、コムギという名前の犬は上がり框で脱力している俺の顔をさらさらした瞳でじつと見上げており、俺も流石にこの無垢なまなざしの生き物を賀茂川あたりに遺棄するとなれば心が痛むもので、ほなここの家主のばあちゃんさえええと言うなら俺はかまへんよと折れた、そうして意外にも「うち犬、好きやで」とえらい鷹揚な家主のばあちゃんはコムギを飼うことを快諾し、突然やってきた柴犬のコムギは俺達と一緒に暮らすことになった。

そうして始まった俺とハルとコムギ、男二人と犬一匹の生活は風いだ海のように静かに穏やかで、そして和やかだった。ハルは長く飲食店で働いていたので料理が滅法上手く、俺が塾講のバイトでアホな中学生に揉まれてクタクタになり深夜に帰宅する頃、それは丁度ハルが女装パブのバイトを終えて帰宅する時間でもあって

「見て、女装とラーメンのコラボ」

など言って化粧もおとさないまま台所で旨いラーメンを作ってくれるし、俺は生来病的に綺麗好きで、故に掃除も洗い物も全く苦ではないという性格をしているもので、毎日息をするように掃除をして共有スペースの台所と居間と風呂と便所に埃と曇りのあることはなく、コムギも無駄吠えをすとか、家を齧って破損するようなことはせず、朝晩の一時

間程船岡山周辺を散歩するのはしんどかったものの、俺達によく懐いて毎晩俺とハルの寝床で交互に寝ていた。

俺は平日毎日学習塾の講師として中学生相手に英語と国語と数学を教え、あとは大学に通って本ばかり読んでいたし、ハルもまた自身の研究課題であるところのクエーカー・フレンド派やらいうのに関わる文献を家にいる間はひたすら読み続けていた。

俺が一度それって何なん、一体何を目指しているモンなんと聞いた時、ハルはいつになく真面目な顔をしてこう言った。

「十七世紀にな、ジョージ・フォックスで人が提唱したプロテスタントの一派で……何て言うたらいいのかなア、まあ人間はひとりひとりその内側に神の光を宿していて、ホンマは善であるという考え方が根本にある教義って言うたらなんかピンとくるか？」

それは性善説でやつか、ハルってそういうのホンマに信じてんのと更に俺が聞くとハルは少し考えてからぼつりとこう言った。

「信じたいねん」

ハルの、還る家

そのように崇高な学問の徒であつたあの頃の俺達とはかくアホみたいになを買うので慢性的に金が無く、バイト代の出る直前の数日間にいよいよ切羽詰まるとコムギにドッグフードを分けて貰つて食うという情けない有様だったが、毎日とても楽しかった。

明日が不安だとか、生きることが漠然と辛いとか、そのような剣呑な心情は俺には少しも無かつた。

でもあれは俺達と一緒に暮らしはじめて最初の夏の送り火の日のこと、高島屋の紙袋みたいな柄のツーピースを着た中年女が俺らの家の上がり框にどっかり座つて妙に細い煙草を咥えながら

「なあハル、十万でええんよ、ちよつと都合してくれへんかなア」

そう言つてハルの財布から何枚かの紙幣を受け取ろうとしている所に遭遇したことがあつた、それが件のハルの母親であり、俺はといえば丁度家主のばあちゃんがスイカをくれるというのでそれをぶら下げて戻つて来たところで、俺はその女を見るなり脊髄反射の速度でスイカを袋ごと投げつけていた。

「このクソ女！ここは俺とハルの家や、はよ帰れ！」

人間は善いものだ、それを信じたいと言っていたハルは、元被虐待児だった。

ハルが小学三年生の時、母親とその交際相手に背中をライターで焼かれた上にあばらを三本折られて意識を失い、救急搬送された病院で児童相談所に保護されて十五歳まで施設で育ったということを俺が知ったのは、一緒に暮らし始めて一ヶ月程した頃、風呂のボイラーが盛大に故障して一緒に近くの古くて豪華な銭湯に行き、ハルの背中一面に残るやけどの痕を見た時だ。

「いやなにこの子、頭、おかしいのと違うの」

捨て台詞を吐きながらそれでもハルから数枚の紙幣をひったくり、鞍馬口通を東に向かって逃げていったハルの母親を追いかけてやった俺を、ハルは背後から抱え込むようにして止めた「ええねん」と。

（何がええねん、ハルが毎晩酔っ払いのゲロ掃除しながら稼いだ金やぞ）

そう思ったものの、俺を背後から抱き抱えているハルの震え声に俺は「お、おう」と言っ
てハルの母親の追跡を諦め、三和土ではつくりと無惨に割れて崩れてしまったスイカを

ハルの、還る家

拾い、綺麗に片付けた。

その日、俺達は本当なら夕暮れを待ってから船岡山に登り、そこから左大文字を眺めてみようと Saying 言っていたのだけれど、なんかそれもだるいなという話になり、もしかしたらウチの物干し台に登ったら見えるのと違うかとハルが言い出して俺達はコムギを連れて暗い物干し台に登った。

「いやー、目の前の家の屋根が邪魔でアカンわ」

「あのチラッと見えるの、アレ『大』の上のこと違うか？」

「コムギをこう：高く持ち上げたらコムギだけでも見えるかしらんで」

「やめとけ、コムギがチビってまうわ」

俺達は、背伸びをしたりコムギを抱きかかえたりしながら暫くねばってみたが、まああの端っこの赤いのが送り火やろと適当に断定して持ってきたビールを物干し台に座って飲んだ。八月十六日、紫野一帯を吹き抜ける夜風はぬるくそしてじつとりと重く、これが死者の魂を彼岸に運んでいる風かもしれないと思うと、俺は少し背中がひやりとした。

「なあ、人間は善いものやって、なんでその状況でハルはそんな風に思えるねん」

物干し台の上で一缶目のビールを飲み干して、ふとハルと目があつた俺は昼間のことを思い出してそんなことを聞いた、ハルは人を善いモンやと信じるには色々がハードすぎやせんか、一体なんでなんやと。するとハルは急に小さな子どものような顔をして

「そう思つてへんと、死にたなるねん、ホンマにどうしようもなく、死にたなるねん」

そう言つて手に持っていた缶ビールを一気に飲み干し、ハハハでもひひひでもない妙な笑い声をあげたかと思うと、次にひいひい言いながら泣きだした。俺はハルに酷いことを聞いてしまったことに気が付き、すまん、今のはなしやデリカシーが無さ過ぎたと謝ったけれどハルは泣き続け、俺はもうどうしていいかわからなくなつて、物干し台の上でハルのことを抱きしめていた。

ハルの髪の毛が生え際がしつとりと汗ばんでいて、どこからか蚊取り線香の匂いがした。

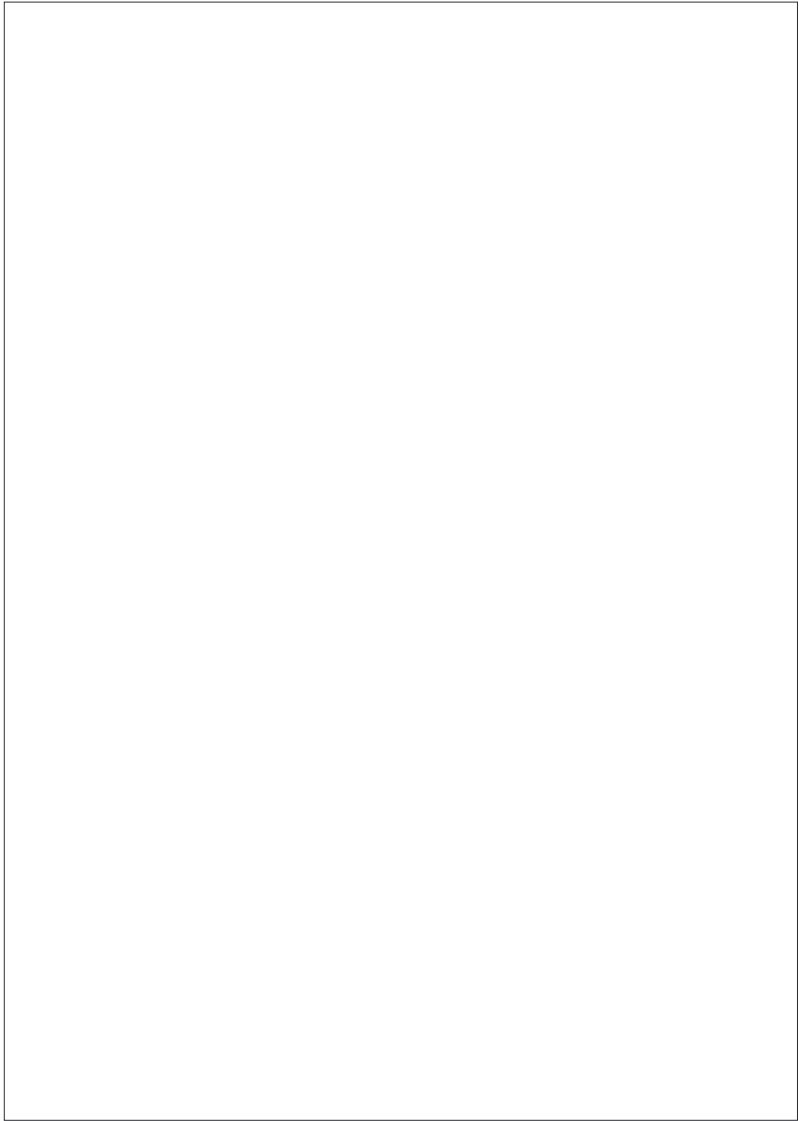
俺達はその後四年間、俺が西大路にある私立高の教師になり、ハルがボストンの大学に留学する年まで一緒に暮らした。ハルが現地で転落死したという知らせを受け取ったのは

ハルの、還る家

その一年後のことだ、事故だと聞いているし、俺はそう信じている。

俺はあの晩、泣きながらそれでも人を信じたいと言っていたハルの魂の戻る場所があるように、三十三歳になった今もハルと暮らした南舟岡町の家に住んでいる。

十三歳になってすっかりじいさんになった柴犬のコムギも一緒だ。



第2回
京都キタ短編文学賞

とかすもの

ち はる
山本千遥

ジュニア部門 最優秀賞

まさか、雨が降るなんて思ってもいなかった。駿くと会っている間に降り始めたのだろうか。

駿くんとは六ヶ月前から付き合っている。彼は成績優秀でスポーツ万能、誰に対しても優しく、女子の憧れの的だ。駿くんは女子から見て高嶺の花であって、自ら告白するような人はいなかった。その隙を狙って告白したのがこの私だ。私自身、自分以外の女子と比べたらかわいの方だと思っていたし、駿くんの返事も良いものだった。そういう、男子に対して積極的すぎるところが嫌われる原因となったのだろう。いつのまにか友達は幼馴染みの藍花だけになっていた。

それにしても、さっきの駿くんの態度はどういう意味だったのだろう。終礼の後の静まり返った教室で、駿くんは顔を赤くしながら口をパクパクさせて私に何かを言おうとしていた。それはまるで小学生が大事な宿題を忘れたことを先生に告げるような感じで、いつもの駿くんらしくなかった。悪いことじゃなければいいけれど。

とにかく、早く藍花の元へ行かなければ。私はカバンで頭を覆いながら急ぎ足で校門へ向かった。

藍花は雨が降っているのにも関わらず、傘をさしながら単語帳で勉強していた。「ちよつとだけ、傘に入れてもらってもいいかな？」

とかすもの

「いいよ」

藍花は口数は少ないが、いつも笑顔で接してくれる。この笑顔に何度救われたことか。左肩がしつとりと濡れていくのを感じながら、二人でたわいもない話をした。定期考査のこと、今読んでいる本のこと、推しのアイドルのこと。どうでもいいようなことだけれど、今の私にはザラザラした心を癒すためにどうしても必要だった。

バス停までは学校から十五分もかかる。次第に話のネタも尽きて、ついに駿くんの話になった。

「さつき、駿くんと何話してたの？」

「それがさあ、駿くんから呼んでおいたくせに、何にも言ってくれなかったんだよ。こんなふうに口をパクパクさせちゃってさ」

そう言つて口を鯉みたいに動かした。湿度が高いからか、空気が十分に気管に入らないで息が苦しい。藍花は小さく笑ってくれた。私の不安が伝わっていなくてよかった。

藍花と別れて一人でバスに乗り込むと他に客が三人いるだけで、どこか寂しい雰囲気だった。鞆の中からスマホを取り出してネットニュースをみる。駿くんのあの顔を思い出さないようにした。それでもある考えが頭の中でずっと巡回している。

バスの窓に無数の雨粒が叩きつけられている。そのいくつかが換気中の窓から中にすりこんできて、スマホの画面に青っぽい点をつけた。

そのときだった。

画面の上の方に「好」と「別」の文字が浮かび上がって、条件反射的にそれを押した。
「好きな人ができた。別れてほしい」

ドラマでしか見たことのない言葉に目を疑った。氷の冷たく大きなトゲが私の胸に突き立てられる。まるで雨水がスマホの上で凝固したみたいだ。さっきから予感していたが、それでも信じられないで、もう一度画面を見る。何度見たって事実が変わらない。もう彼と話すことはないだろう。

高校に入ってからずっと恋愛と勉強しかしてこなかった私は、この悲しみから抜け出す術を知らない。目からこぼれ落ちた涙が頬をつたって、また青い点をつけた。

誰にも見られなくて顔を鞆に埋めていると、いつのまにか眠ってしまった。眠りは浅かったようでもあり、深かったようでもある。

パツと目を開けて窓を見ると、雨はもう止んでいて、いつもと違う景色が見えた。しまった、と慌てて降車ボタンを押す。一人だけの車内に「次、止まります」の音が静かに響いた。

降りたバス停には「船岡山」と書かれているだけで、今どこにいるのかわからない。こんなときは駿くんがすぐに教えてくれたと思うと急に悲しくなつて、涙が溢れた。

とかすもの

一人で立っていると、何かが肩に触れたような気がした。驚いて、背筋を伸ばして振り返ると、そこには小柄なおばあさんが立っていた。薄いピンクの上品なスカーフを巻いている。左手には小さな袋を持っていた。

「どないしたん？えらいたくさん泣いてるやん」

おばあさんが首をかしげて私を見つめている。

「あの、船岡山って京都のどくら辺のことですか」

そんなことも知らんのか、と思われるかと思ったが、優しく教えてくれた。

「北区や。大徳寺の近くやけど」

私は大徳寺がどこにあるのか知らなかったけれど、

「わかりました。ありがとうございます」

と言って、なんとなく西の方向にとぼとぼ歩いていった。十メートルほど歩くと今度は左手を掴まれた。

「なあ、船岡山、登ってみーひん？」

彼女の目が思いのほか真剣で、よく見ると吸い込まれそうなほどに澄んでいた。

いつのまにか私はおばあさんの隣を歩いていた。

船岡山は思っていたよりも簡単に歩くことができた。その頃にはすでに太陽が始めて

いて、木々の雫が光に反射して美しい。

おばあさんと話していて分かったことがある。一つは彼女はこここの近くに住んでいるということ。そして今は夫を亡くして一人で暮らしているということだ。

頂上に着くと京都の街が一望できた。人はほとんどおらず貸切状態だ。

「すごくきれいですね」

「当たり前や。ここは国見の丘やからな」

とおばあさんは自慢げに言う。

「それで、どないしたん？さつき泣いてたやろ」

急に聞かれて戸惑ったが、少しづつ経緯を話した。ある男子と付き合っていたことから、突然スマホでふられたことまで。おばあさんはずっと黙って聞いてくれた。時々頷いてくれる。

「大丈夫やで。ここに来たら何度でもやり直せる」

おばあさんは私の目をしっかりと見る。それから、昔を思い出すように遠くを眺めた。

「ここはな、うちの人と付き合い始めた頃に登った山やねん。それから二年くらいあとに結婚したんやけど、ほんまに幸せやった」

「平安京はここから始まったんや。そやからやり直したらええ。ここから全てが始まるんや」

私は「はい」としか言えなかったが、言いたいことがわかるような気がした。
おばあさんは袋からあぶり餅を出して、私にくれた。

「今度はもつとええ人やいいな」

と言ってくれた。おばあさんの笑顔に自然と顔がほころぶ。

あぶり餅はまだ少し温かい。口いっぱいに、優しく甘いみその味が広がる。

おばあさんの言葉と、あぶり餅の温かさが私の中の冷たい氷を溶かしてくれる。それが
水となり、涙となって溢れ出た。今までで一番優しい涙だった。

「もう一つ食べてもいいですか？」

と聞くのがせいっぱいで、無我夢中で食べ続けている自分がいた。

「うしろ見てみ」

おばあさんが北の空を指差す。

そこには見たことがないようなきれいな虹がかかっていた。

これからいいことがたくさんありますように。

収録作品はフィクションです。
実在する人物、団体等とは関係がありません。
また、作中の表現については、著者の意図を尊重し、掲載しています。

第2回 京都キタ短編文学賞

発行年月：令和6年8月

発行：京都市北区役所地域力推進室

著者：黒田きな子、山本千遥

印刷物番号：063057号

問合せ：京都市北区役所地域力推進室
〒603-8511

京都市北区紫野東御所田町 33-1

電話：075-432-1199

FAX：075-432-0388

第3回 京都キタ短編文学賞 作品及び一次選考委員の募集

現在、「第3回 京都キタ短編文学賞」の作品及び一次選考委員を募集しています！！是非皆様のご協力をお願いします。

1 作品の募集

応募期間：令和6年7月15日（月・祝）から令和6年10月15日（火） ※必着
募集作品：北区の魅力が伝わる“北区に行ってみたくなる”

2,000～5,000字までの短編小説

応募資格：小学生以上の方であればどなたでも

応募方法：原則、インターネット投稿

※募集要件の詳細は、下の二次元コードからご覧ください。

賞の内容

<一般部門>

最優秀賞：賞金5万円

デジタルメモ「ボメラ」

優秀賞：賞金3万円

船岡山賞：船岡山エリアにちなんだ賞品

（1万円相当）

<ジュニア部門>

小学生賞：図書カード1万円分

中学生賞：図書カード1万円分

高校生賞：図書カード1万円分

2 一次選考委員の募集

募集期間：令和6年7月15日（月・祝）から令和6年9月15日（日） ※必着
応募資格：北区をお好きな方や関心のある方、本を読むのが好きな方

※ 区外在住の方も応募可

※ 本文学賞に作品に応募される方は、一次選考委員への応募はできません。

※ 一次選考委員への報酬は無償とします。

応募方法：北区役所ホームページの専用ページ内の応募フォーム（外部リンク）
又は郵送のいずれか。

就任特典：来年に開催予定の表彰式にご招待

（受賞者や応援大使の皆さんが出席されます。）



第3回「京都キタ短編文学賞」
の応募作品と一次選考委員を募集中！！
詳細はこちらの二次元コードから。

作品集を読んで景品をゲット！ 京都キタ短編文学賞記念キャンペーン

期間：令和6年8月15日（木）から令和6年10月15日（火）まで

昨年度に実施した「第2回 京都キタ短編文学賞」の入賞作品を存分にお楽しみいただける、2つのキャンペーンを開催します！！

1 クイズキャンペーン

場所を問わず、どなたでもご参加いただけます！

入賞作品を読むと答えることができるクイズを出題します（クイズは下記のキャンペーンページから）。

正解された方の中から、キャンペーン終了後に抽選で景品をプレゼント！！
入賞作品はデジタルブックとして北区役所のホームページで公開しています。

2 アンケートキャンペーン

作品集をゲットした方がご参加いただけます！

区内で配布される作品集に掲載の二次元コードから参加できるアンケートです。

アンケートをご回答された方の中から、キャンペーン終了後に抽選で豪華な景品をプレゼント！！

※ 作品集について

「第2回 京都キタ短編文学賞」の入賞作品を多くの方に読んでいただくために、入賞作品の作品集を区内で配布。（配布先は左下の二次元コードからご確認ください。）作品集は以下の3本立てです。

- ① 「第2回 京都キタ短編文学賞」の入賞作品
- ② 同文学賞の応援大使の先生方寄稿の北区を舞台にしたオリジナル作品
- ③ 作中の舞台解説

→作中の登場舞台を実際に巡っていただけるよう、作品に登場する舞台の観光案内情報を掲載しています。



キャンペーンや作品集の配布先は
こちらの二次元コードから。



入賞作品のデジタルブックは
こちらの二次元コードから。

令和4年度に実施
「京都キタ短編文学賞」

受賞作品は、こちらからお読みいただけます。



令和5年度に実施

「第2回 京都キタ短編文学賞」

受賞作品は、こちらからお読みいただけます。



京都キタ 短編文学賞

発行: 令和6年8月 / 北区役所地域力推進室
京都市印刷物 第063057号

